

# 海外文化紹介のためのデザイン提案

岡山県立大学 デザイン学部 ビジュアルデザイン学科

廣岡 瑠唯 森本 芽衣 森安 はづき 森田 愛未 松村 歌音 大崎 桜子 佐藤 綾佳 大月 希海 風早 由佳  
se523026@dgn.oka-pu.ac.jp

## 1. はじめに

本研究は、2023年から2024年に行った海外文化を紹介する冊子作成と展示を通じて、海外文化を伝えるエディトリアルデザインに重要な要素を考察する。特に、誌面づくりにおいてメインコピー/メインビジュアル、コピー/ビジュアル、本文のデザインの強弱は、興味を惹きつけるデザインを行う上で重要である。これらの要素に加え、冊子であれば綴じ方を意識したフォントや行間の調整を行う必要がある。読者が適切な情報量を適切な順で読めるよう誘導する誌面デザインを実現するために、実際に作成した誌面をもとに、紹介する国のイメージを伝える色彩計画や誌面構成におけるデザインの実験的考察を行う。

## 2. タイポグラフィによる効果

世界文化紹介誌『Cul Cul』のロゴタイプは、「カルカル」という音の響きに合う丸みを帯びた連続性を感じさせる形状と、エキゾチックな風合いを意識して制作された(図1)。小谷(2021)は、企業体は企業理念に沿ったメッセージを大衆に向けて発信し、社内外の企業イメージを一致させるために、シンボルマークやロゴタイプなどの企業の視覚統一、VI(ビジュアル・アイデンティティ)戦略をとる必要があると述べている。冊子『Cul Cul』のイメージを読み手の中に構築する上で、ロゴタイプの作成は有効であると考えられる。現状カラーは固定しておらず、巻号ごとのデザインに合わせて変更している。

図1 『Cul Cul』のロゴタイプ  
(制作者: 森本芽衣)

ページのレイアウトでは主にグリッドを利用している(図2)。ジュート(1999)によると、グリッドの目的は反復機能、構図、伝達の3つに分けられる。反復機能は、制作時のテンプレートとしての役割や、複数の紙面に一貫性を持たせることで、読み手が探しているものを見つけやすくするという伝達の重要な要素でもあり、構図もまた、読み手の視線を誘導するという伝達の機能があるとジュートは述べている。グリッドを利用することにより、読み手の読解作業を単純化させることができると考えられる。

A5サイズに対して、文字のサイズは本文を7pt、見出しを24ptに設定し、ジャンプ率をやや高めにするにより情報の優先順位づけを行っている。フォントは見出しと本文共に、Fontworksの「筑紫A丸ゴシック」を使用している(図3)。ゴシック体は縦横の棒の太さが均一で装飾が控えめであるため、視認性が高い。「筑紫A丸ゴシック」は線の端を丸く処理されているため、ゴシック体本来の視認性に加え、読み手に親しみやすさを与える。一方で山本(2019)の研究では、文字サイズが約8.5ptの長文の場合、ゴシック体よりも明朝体の方が眼球運動の停留回数が少なく、読了時間が短いという結果が出ている。今後、本文では明朝体を用いることも視野に入れたい。

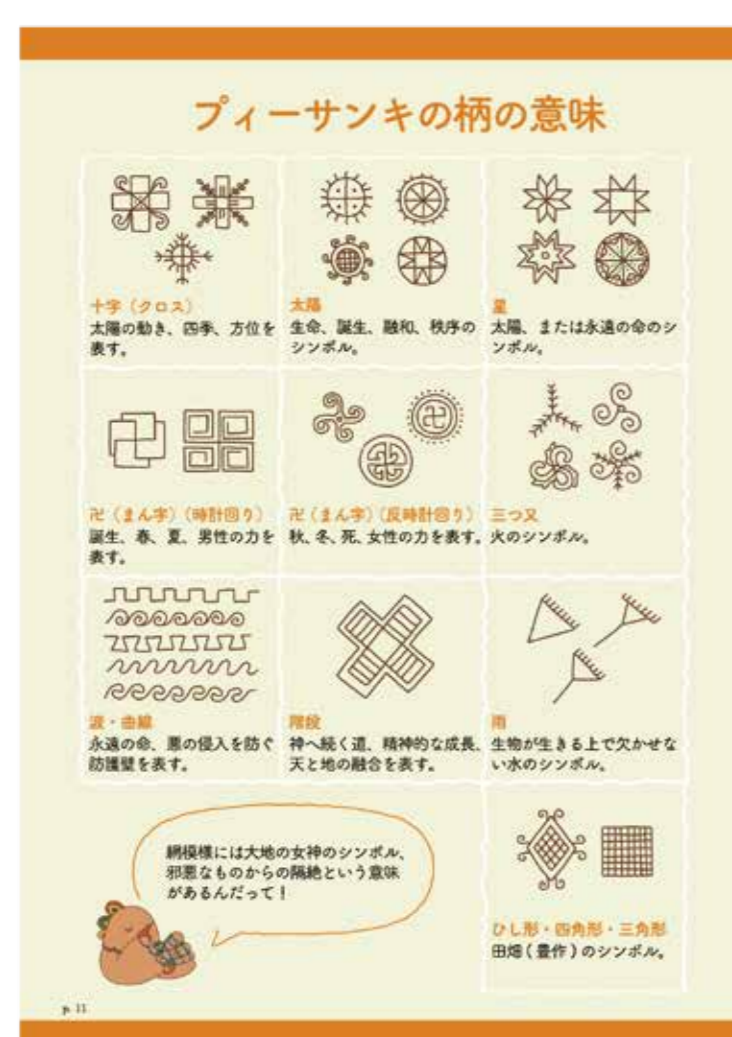


図2 グリッドを利用したレイアウトの例  
(制作者: 森安はづき)

丸  
ゴ  
シ  
ッ  
ク

筑  
紫  
A

図3 筑紫A丸ゴシック  
(制作者: 森安はづき)

## 3. 色彩・イラストによる効果

冊子『Cul Cul』の顔となる表紙に使われているメインカラーは、取り上げる国の国旗や伝統工芸品によく見られる色を採用している。サブカラーの色数を増やしたり、コマ割りのようなレイアウトに各ページのイメージイラストを配置したりすることにより、冊子に様々なジャンルの情報が

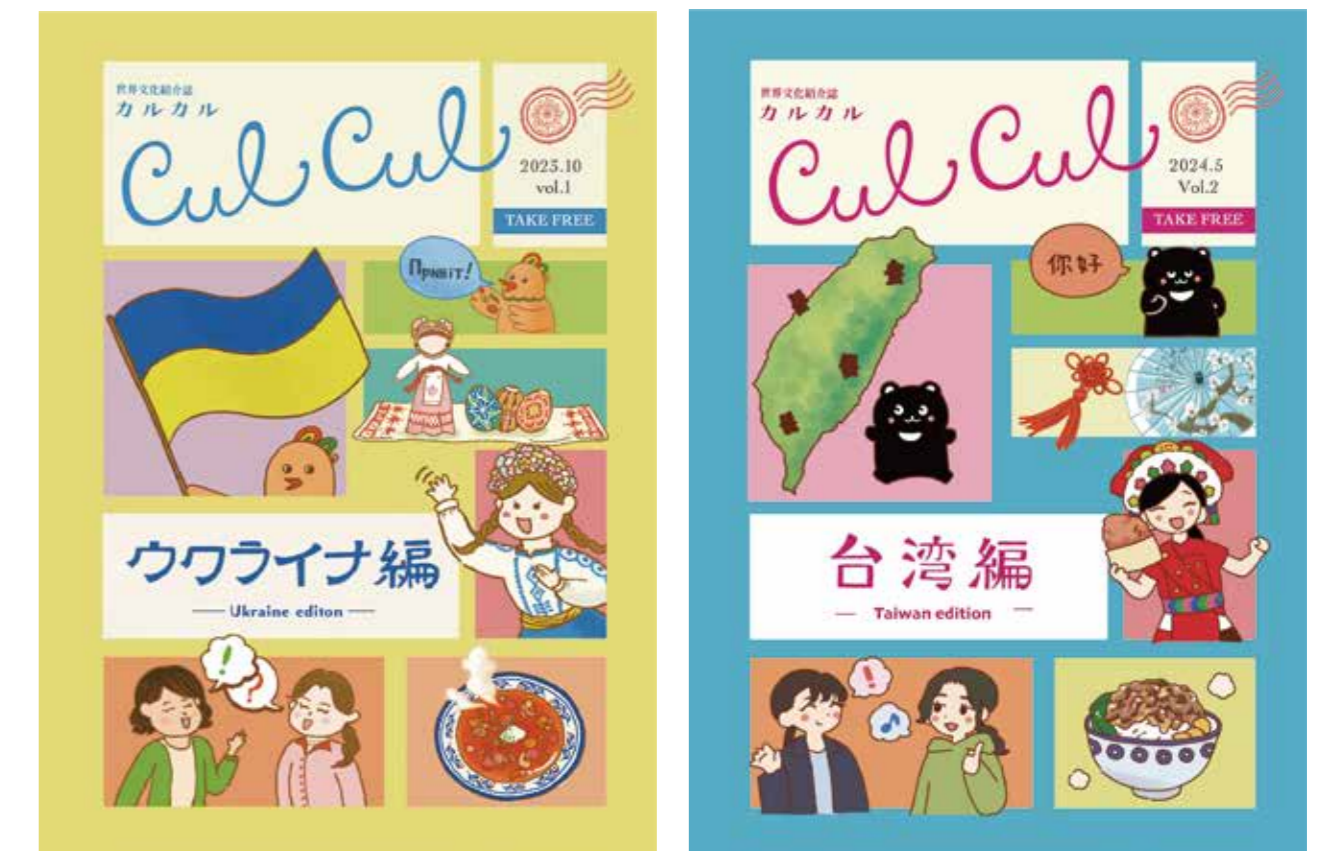


図4 『Cul Cul』ウクライナ編(左)と台湾編(右)の表紙  
(制作者: 大月希海・森本芽衣)

載っていること、またどんな情報が載っているかを一目で感じられるようなデザインにしている。なお、学生が気軽に手に取ってもらいやすくするために、全体のトーンをポップで鮮やかな雰囲気を設定している。

周村(2009)は、「初学者は、適切な量のイラストが含まれ、イラストによって、学習の重要度が視覚的にわかる教科書に対して、好感を持つ」と述べている。本文中では、キャラクターを配置することにより、それぞれの項目を紹介するナビゲーターとしての役割を持たせると同時に、読み手と同じ目線で本文を辿っていく存在として、読み手の心理的ハードルを下げる効果が見込める。また、キャラクターデザインは国獣や伝統衣装、国のイメージカラーなどを意識したものになっており、国柄を表す要素でもある。



図5 ウクライナ編に登場するマリチカ(左)とペトリ(右)  
(制作者: 森安はづき)



図6 台湾編に登場するイーツァン(左)とションション(右)  
(制作者: 森安はづき)

## 5. まとめと今後の展望

タイポグラフィや色彩、イラストの観点から、海外文化を伝えるエディトリアルデザインに重要な要素を考察した。レイアウトや文字のサイズ、フォントを内容や分量に応じて選定することで、読解作業を単純化させることが可能である。また、ロゴや色彩、イラストにより冊子の世界観を確立したり、心理的な作用を読み手に促すことが可能である。読み手が存在していることを常に意識し、作り手の一方的な発信ではなく「伝える」ことに重点を置いたエディトリアルデザインを行うために、今後は本文に使用するフォントの選定や、SD法を用いた印象評価などを行い研究を発展させたい。

## 参考文献

アンドレ・ジュート(平賀幸子訳)『Grids』、ビー・エヌ・エヌ新社、1999-2003、p8。  
小谷充『映画の中のロゴマークー視覚言語と物語の構造』、水曜社、2021、p69。  
周村諭里「大学の教科書におけるイラスト利用の効果に関する研究」『尚美学園大学総合政策研究紀要』No. 18、2009、pp. 117-32。  
山本政幸「本文横組版におけるゴシック体と明朝体の読みやすさの比較」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』、No. 66、2019、pp. 266-67。